

# 学習体験を語る

## —地域および大学で学習を経験

報告者：東京外国語大学大学院博士前期課程言語応用専攻

モンコンチャイ・アッカラチャイ

モンコンチャイ・アッカラチャイ ただ今紹介にあずかりました、タイからまいりましたモンコンチャイ・アッカラチャイと申します。本日は「学習体験を語る—地域および大学で学習を経験」というテーマでお話したいと思います。私は、2000年にタイのシーナカリンウィロート大学の社会学部政治学科に入学しました。日本語は副専攻でしたが、日本語を習いはじめたのは2年生のときでした。2003年に初めて日本に留学しました。一度帰国して、また日本の文部科学省の奨学金を得て研究生として再び日本に留学することになりました。現在、東京外国語大学大学院博士前期課程言語応用専攻日本語教育学専修コースに在籍しています。



モンコンチャイ・  
アッカラチャイ

早速ですが、私が出会った地域日本語についてお話ししたいと思います。2003年4月に交換留学生として初めて日本に留学しました。東京にある亜細亜大学の留学生別科で1年間日本語を学びました。日本に来る前には、日本語が上手になりたい、日本人と交流したい、日本の文化を知りたいなど、さまざまな期待や夢を抱いていました。しかし現実とは違った。ある日、気がつく自分の周りには留学生しかなくて、日本語の話し相手は留学生がほとんどでした。留学生の友達との交流を通じて、お互いの国の文化や考え方などを知ることができることは非常に興味深かったのですが、せっかく日本に来ているのに教室にいる日本語教師としか日本語を話す機会はなく、とても残念に思いました。食堂でもキャンパス内でも、留学生グループ、日本人グループごとに集まっている场景をよく見かけ

ました。そこで、どのようにしたら日本人と交流ができるのか考えるようになりました。そんなある日、大学の国際交流部事務室の前でボランティア日本語教室のパンフレットを見つけました。留学生の友達2人を誘って、「西東京にほんご教室」に通うようになりました。その教室では、大学の別科の授業とは異なることが行われていました。本日は、留学生として学校機関で受けた日本語教育と、地域で行われる日本語教育の現場での体験に基づいた双方の違いについて、お話ししたいと思います。

学校型日本語教育と地域型日本語教育とは、実際にどのように異なっていたのか、学習者、教師、学習者と教師との関係、そして教授法の4つの要素に分類し、それぞれの相違点についてお話しさせていただきます。

まず学習者についてですが、学校型日本語教育では留学生や就学生がほとんどです。学習者の目的ははっきりとしていて、大学進学や就職であることが多いです。年齢としては、だいたい20代前半で、主として留学あるいは就学の在留資格を持っている学生なので、授業の出欠のチェックが厳しい。留学の在留資格で来た以上、原則として積極的に授業に参加する義務があるということです。一方、私が参加した地域型日本語教育では、学習者は主として主婦が多く、就学生、留学生や会社員などさまざまな人がいました。学習者の目的は日本語が上手になりたいという前提は言うまでもないですが、それは進学のためではなく、旦那さんと日本語でコミュニケーションをとりたいとか、日本人と交流したい、または日本の文化を知りたいという希望を持って授業に参加していました。つまり、学問としてというよりも、コミュニケーションの手段としての日本語を学んでいる側面の方が強いのではないかと思います。学習者の年齢は、小学校低学年の子どもから大人まで幅広く、そして在留資格は日本人配偶者や定住者がほとんどです。そのため、日本語を勉強しなくても在留資格を失うことはありません。義務で来ているのではなく、勉強をしたいから参加しているわけです。

次は、教師です。学校型日本語教育の現場で日本語を教えるのは、日本語の教授法や専門知識を持っている人です。例えば日本語教師養成講座420時間を修了した者や、日本語教育能力検定試験に合格した者、または大学で日本語学や日本語教育の分野を専攻した者といった人によって授業が行われています。それに対して地域型日本語教育の現場においては、日本語を指導する人は必ずしも日本語教育に関する専門知識を持っているとは限らない。指導者は、主婦、定年退職者、会社員、学生などです。こちらの方は、ボランティアとして指導しています。

また学習者と教師との関係を見ますと、学校型日本語教育における学習者と教

師との関係としては、言うまでもなく日本国内外を問わず、教える側と教えられる側といった上下関係が固定化されています。教師は上の立場から学習者に日本語を教えるという関係です。しかし、地域型日本語教育における学習者と教師との関係では、学校型の例とは異なり、とても親しく、いろいろなことを相談できる存在ともなります。〇〇先生ではなく、〇〇さんと呼んだりしていますので、学校型のような上下関係がなくなるような感じがしました。日本語をきっかけとして相互に交流し、学びあえる対等な人間関係を感じさせるために、同じ地域に暮らす市民同士がともに活動するという気持ちで参加していました。

それから、教授法についてですが、学校型日本語教育ではその分野の専門知識を持ち、専門的な訓練や実習を受けた日本語教育の専門家がいて、教材や教具が準備されています。指導のためのカリキュラムも用意されていて、授業はあらかじめ決められた指導内容と方法に沿って進められています。学習者の成果を評価するために試験なども実施されています。一方、私が通っていた地域型日本語教育の教室では、もちろん教科書を使って教えることもあったのですが、学習者が勉強をしたい内容や広告、プリントなど、または読みたい新聞の記事を用意して参加し、授業が進められました。用意していない場合は、教室にある教科書を使うということでした。方式としては、週1回のマンツーマン指導が多かったです。毎週新しい学習者が来たり、休んだりする学習者もいるので、学校型日本語教育の現場で行われている文型積み上げ（文型を基礎として簡単な文から難解な文へと学習していく方式）のような教え方では、地域型日本語教育の現場では限界があると感じます。文法よりも、表現方法についての文化的な背景の勉強をすることが中心だと私は思います。

表1 学校型日本語教育と地域型日本語教育との大きな違い

	学校型日本語教育	地域型日本語教育
1. 学習者	生徒	1人の人間
2. 学習支援者	先生	同じ地域に暮らす市民同士
3. 場所	教室	交流の場
4. 理念	教育	共育

私の体験によって、実感した学校型日本語教育と地域型日本語教育との違いについてまとめると（表1）、1の学習者とは、日本語を学びに来ている人を意味します。学校型日本語教育の場合は生徒として授業に参加するのに対して、地域型日本語教育では生徒ではなく1人の人間として活動に参加しています。

2の学習支援者とは、学校型日本語などの学習を支援しよう、または教えようと思って授業に参加する人のことです。言うまでもなく、学校型では先生という存在であり、つまり教える側として教えます。一方、地域型では、教えたいというよりも手助けしたいという気持ちの方が強いのではないかと私は思います。そのため、学習支援者でもあり、かつ同じ地域に暮らす市民同士として交流するということではないかと考えられます。

次に3の場所としては、学校型の場合は、先生が教壇に立って日本語を指導する教室が想定されています。一方、地域型の場所としては、学校型の教室というようなものではなく、同じ地域に暮らす市民同士の交流の場としての教育の場が考えられます。

4の理念としては、学校型では、あくまでも日本語を教育すること、つまり教育であるため、誰かに何かをどこかで教えるということが基本にあります。これに対して地域型では、学校型とは異なりお互いに話し合ったり学びあったりするという考えがあるため、教育というよりも、ともに育つ共育と言った方が適切だと私は考えています。

私が体験して実感した学校型日本語教育と地域型日本語教育の違いについて述べてきましたが、学習者は、学校型日本語教育でも地域型日本語教育の学習者でも、日本語が上手になりたいという共通点があります。もう一步踏み込んで、ではなぜ上手になりたいかを考えると異なってきます。学校型は、高等教育機関で学問的に日本語を学ぶためという目的がほとんどです。それに対して地域型の方は、同じ地域に暮らす市民同士と交流し、日本社会で円滑に生活していくためということではないかと私は思います。以上です。ご清聴ありがとうございました。

**野山** どうもありがとうございました。通常の大学のゼミの発表のようにうまくまとめていただきましたね。

モンコンチャイさんと一番最初に教室でつきあったというか、交流をした人がこの場にいます。「西東京にほんご教室」の運営にもかかわっていて、野山班のサブコーディネーターをしている山辺さんです。私たちはモンコンチャイさんを、通称でゴルフさんと呼んでいます。ゴルフさんが教室にいらっしゃったころの話を少ししていただけるでしょうか。

**山辺真理子** 1993年から「西東京にほんご教室」——当時は「保谷日本語教室」でしたが——を開いております。先ほどの話を聞きながら考えていたのですが、

私たちは毎週土曜日の午後2時から4時に、年末年始と祝日以外は常にその場を開いている。そうすると、そこにいろいろな人が訪れて、学習をしたり、交流をしたりというふうに考えてきましたが、そこをちゃんと交流の場と言っていただけたのは、場としては機能しているのだと思いました。



いろいろな方が担当したと思いますが、だいたい40代から50代の女性でしたね。ゴルフさんにとってはどんな人たちだったのでしょうか。お母さんみたいな感じですか。

**モンコンチャイ** そうですね、お母さんというか親戚のような感じです。

**山辺** 先ほどの発表では、学習者が勉強したいものに応えて、持ってこなかったらテキストでとっておっしゃっていました。実は私たちは、誰かを担当すると決めていたら、その人に合うものを常に用意するように、準備しておくのが約束になっていました。それはできていなかったのですかね。

**モンコンチャイ** それは、自分が勉強したいことがある人はそれを用意して持ってくればよいということなので、それは私にとってすごく良かったと思います。

**山辺** ゴルフさんにはそれが向いていたということですね。たしか当時は、教室まで自転車で45分かかるということをお聞きしたと思います。東京外国語大学で数年ぶりに会って「教室の印象はどうだった？」と聞いたら、「遊んでいると思った」とおっしゃっていましたね。でも遊んでいると思いつつも、45分かかって通い続けた理由というのは何でしょうか。

**モンコンチャイ** 最初の授業に参加したときには、それが勉強かどうかよくわからなかった。ですが、先ほども話しましたが、大学では日本人の話し相手といたら日本語教室のクラスの先生しかなくて、話すチャンスがなかった。もっと日本人と交流したいと思って、「西東京にほんご教室」に通うようになりました。自転車で45分かかるとはありますが、運動として考えればそんなに大変なことではなかったです。

**山辺** やはりそうはいつでも、雨の日も風の日も結構大変だと思います。何が楽しかったのでしょうか。どんなことがよかったですか。

**モンコンチャイ** 楽しかったということもあり、自分のやりたいことができるということが最も大きかったと思います。

**山辺** 先ほど日本人と話す機会という話がありましたが、やはり学校教育の中では、日本人と話すといったような本当のコミュニケーション能力を育てるのは難しいでしょうか。

**モンコンチャイ** 初めて日本に来たときにはあまりしゃべれなくて、日本人と交流するのは英語を使って交流するしかなかったです。でも、せっかく日本に来ているのにまた英語を使うのはもったいないと思ひまして、そういうことを始めました。

**山辺** 主に日本語でどんな話をなされたのですか。日本語で、地域で親戚のようなおばさんとどんな話を？

**モンコンチャイ** 具体的に言うと、例えば敬語のことです。学校で勉強をしているとどういふふうに使つか、その表現の言い方の練習とかロールプレイの練習とか、そういうことしかできなくて。でも、実際に地域に行ってみて、親戚のようなおばさんと話しますと、自分の国の敬語について、また日本の敬語についてどういふ文化背景があるか、そういう話もできてとても楽しかったです。

**山辺** 当時、ゴルフさんが来るとその場もすごく明るくなって、みんなゴルフさんが来た来た、ということで楽しみに待っていたのです。そういうふう感じていましたか。

**モンコンチャイ** とても感じられました。行ったら、みんなもう「ああ、ゴルフさん」とすぐ呼んでくれました。

**山辺** いつも心から待っていました。最初にしたゲームというのを思い出したの

ですが、私はこの野山班のメンバーとして、ちょうど協働実践研究で参加型学習というのをみんなと学んでいるときでした。私はそれをすぐ自分の会に持って行って、「いいところ探し」というのをやったんです。それはたまたま本にも載っている事例なのですが、ゴルフさんはそのときの参加者で、それを遊んでいると思ったというふうに一言で片づけてくれて、それはそれですごくうれしかったです。

**野山** ありがとうございます。当時、ゴルフさんが教室に行かれたときの様子がよみがえってきた感じかと思います。実際に大学の制度の中で、あるいは研修生として来日して学んでいた人が、地域日本語教室に行ったときの感じ、感覚の一端を、皆さんの前で提示したということは、とても貴重な話であったろうと思います。

